



# 厄介婆



川崎ゆきお

暑い盛り、老婆が歩いている。日傘も差さず、頭部に被り物もしていない。祈祷師の婆さんだ。見ているものは風景ではない。頭の中にあるのは日々のことでもない。呪文や悪霊の世界を見ている。だから、いってしまっている。そのためか暑さなど何とも思っていない。これは避暑のための健康法ではない。

そこに坊主が現れた。坊主は丸い大きな日笠を被っている。炎天下なので当然だろう。

この二人、徐々に接近する。向こうから来る者、こちらから来る者、そのうちすれ違う。

坊主から見ると、老婆はただの老婆でしかない。近所の婆さんが歩いていると思っている。祈祷師のスタイルではないためだ。

「そこな坊」

先に声をかけたのは老婆だ。その声は裏返っている。

坊主は、ただの婆さんではないと察する。何か因縁でも付けられると困るので、無視しようとするが、距離が近すぎ、それも出来ない。

「怨霊が憑いておる」

老婆が声高に言う。

「それは、婆さんの方ではないのかな」

「わしは祈祷師」

「ほう」

「おぬしは？」

「一介の雲水。旅の者」

「それにしては軽装」

「この近くの寺にしばし厄介になっておる」

「あの寺か、あそこは妖怪の巣窟。その一匹が乗り移ったのだな。可哀想に」

「はて？」

「気付かぬか」

「それより、暑くはないか、その姿で」

「暑うない」

「それで、何となさるな？」

「祓ってやる」

「その妖怪とやらをか」

「そうじゃ」

「別に困ってはおらぬが」

「妖怪が憑いておる」

「だから、それはもう分かった。急ぐゆえ、失礼するぞ」

坊主はすたすたと歩いて行った。炎天下で立ち話などしたくなかったのだ。

老婆は坊主の後ろ姿を見ている。

「のりの悪い坊じゃ。この村ではみんな相手にしてくれるのに、やはり余所者は薄情じゃ」

祈祷師の老婆は、ブツクサ言いながら、歩き出した。

「誰ぞ相手になってくれる者はおらんかいのう」

厄介な婆さんだ。

了